

やま と

# 邪馬台 三国志

邪馬台国はどこか（邪馬台国の国々）  
/火瓊瓊杵の日前国と西都 / 天火明の日高見国と東都

男神天照大神の正体 籠神社と海部氏系図  
邪馬台国の興亡～大和朝廷成立までの歴史  
邪馬台国の興亡史概略



神武は大和朝廷の開祖  
天照大神は卑弥呼

高田康利著



弥生史の常識や通説を歴史的観点から検証していくと、戦前から信じて疑うことのなかった皇統 1 万世一系も、「百余国を束ねる統一王朝など存在しなかった」とする戦後の学校教育も、間違いだらけと分かります。邪馬台史の全貌がとんと解明できない原因は、ここににあります。司馬遷の信念や和辻哲郎博士の説に立ち返り、一から考え直す以外にありません。

縄文晩期、呉太伯ら子孫が建てた天之国は、前三世紀の倭国（高天）王朝、一世紀の倭奴国王朝（天地）、大乱後の南九州では高天系の日隈・日前・和国の名で再興された後、大和朝廷として蘇った。

一世紀後半、大乱に見舞われた倭奴国王朝は、伊弉諾・日神の天照大御神・火瓊瓊杵・火火出見・磐余彦率いる高天系、水天神天照大神・日神改めヒミコ・垂仁・景行率いる瑞穂の邪馬台国に分裂して覇権を争い、三世紀後半、和王磐余彦（神武）が東征して橿原に大和朝廷を樹立し、倭奴国王朝再興を叶えた。東西に二朝が並立した本物語では、記紀の矛盾が自然消滅する上、中国史書、考古学結果、神社の縁起、各地の伝承・地名とも概ね合致する。視点を変えると、こんな見方のできる歴史だった。

★前五く前四世紀、戦国中国の覇権争いに敗れて、日本列島に逃げ込んだ呉王夫差と越王句踐の子孫らが建てた天之国と敵之国は、邪馬台国末期に至るまで延々と覇権争いを繰り返してきた。結果は、戦国期の中国史とは正反対に、天之国が天下を制して大和朝廷を開いたのです。

★縄文中期に北九州に興った那珂つ国（中つ国）も、弥生期に興る天之国と敵之国も、不老不死実現を掲げながら独自の蓬莱郷づくり、神仙の国（神国）づくり、天竺流常世づくりに奮闘努力してきた。

★日神が切実願った倭国・倭奴国王朝の再現や、海幸彦が火火出見に命乞いして誓った誓約は、火出見を襲名した磐余彦が大和朝廷の初代天皇即位後に、晴れて叶った。即ち海幸彦（火明饒速日）末裔は、物部姓と十握剣を賜り、磐余彦火火出見の宮殿を夜も昼も守護する役目を背負わされた。

★高皇産霊による葦原中つ国平定、神功の新羅遠征、日本武尊による日高見の蝦夷討伐は、布都御魂の十握剣、日矛、草薙剣（天叢雲剣）の威光の下で、「刃に血塗らずして勝つ」を達成した実話だ。

これを国是に掲げた邪馬台史は、三国志や戦国・幕末期を遙かに凌ぐ世界中に誇れる歴史でした。

### 司馬遷の信念

日本の上古を切り開くのは、南方や大陸からやって来る渡来人たちだった。それぞれが固有の宗教・伝統・風習、歴史・神話・伝説を引きずりながら、日本の歴史を作り上げてきたのだ。

その中国では王朝が再三入れ替わること、古い歴史を反映するはずの神話や伝説が断片的にしか残らず、しかもこっけい話が多いことから、歴史事実から外されてきた。

だが、その一部が我が国にしっかりと根づいており、「記紀」神話や伝承、地名、風俗・風習、さらに歴史そのものと深く結びついてきた。それを根拠の無いつくり話または単なる言い伝えと切り捨てる前に、日本の古代史とどう符合するのか吟味しなければなるまい。

司馬遷の言を借りると、「総じて、上古のことを伝える書経（五帝・周の王者の言辭）や古老の伝承から、あまり離れていないものが真実に近い。そのことに深く思いを巡らし、心にその意を知ること、それが大事なのであって、伝えられていることは決して虚言ではない」ということになる。

☆ヨーロッパでは、ホメロスの『イリアス』や『オデュッセイア』にある物語は、古代の伝説と決めつけられたが、十九世紀になってドイツの素人学者シュリーマンがトロヤの大城壁都市とともにおびただしい財宝を探しあてるに及んで、記述どおりに史実と判明した。

☆中国でも、司馬遷の書き残した『史記』『殷本記』は、神代と歴史時代を結びつけるための作り話に過ぎないとされたが、二十世紀に、王国維が甲骨文字を解説し、ついで殷の宮殿跡や陵墓が発見されたことで、「殷本記」にある事績や十数代にわたる王名が真実と判定された。

これに加えて、哲学者で古代史に造詣の深い和辻哲郎博士の説も頭に叩き込んでおく必要がある。「皇室の発祥が大和であったなら、畿内勢の祭器だった銅鐸は大和朝廷や皇室の祭祀・文化の中に何らかの形で残っていて然るべきだが、銅鐸は山中に打ち捨てられた形で見つかる。

一方、北九州系の鏡・剣・玉は皇位の印しとなり、副葬品として古墳に埋納されてきた。このことは、北九州勢が畿内勢を打ち破ったことを物語っている」

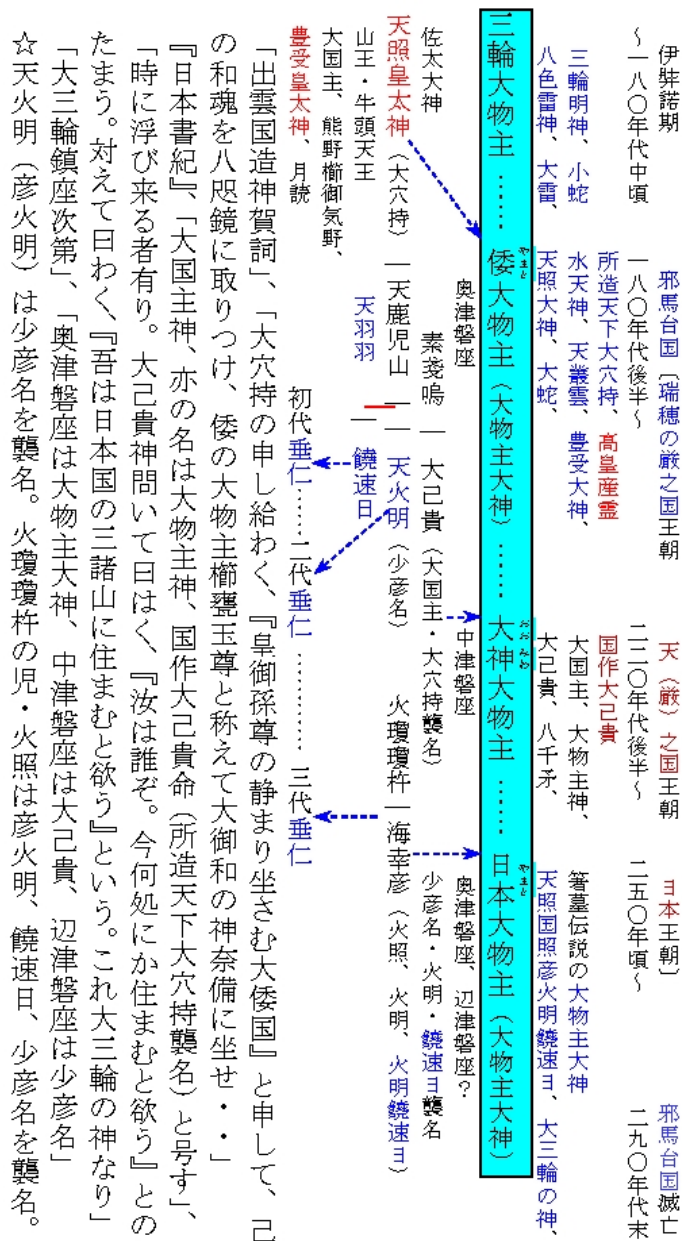






### 垂仁天皇三代と大物主四代／三輪山磐座の関係

本書の系譜から、垂仁天皇が在位九十九年にわたる理由や、大物主の名が時期を少しずつずらしながら、三輪大物主、倭大物主、大神大物主、日本大物主に引き継がれた歴史が見て取れる。







◇邪馬台国はどこか／火瓊瓊杵の日前国と西都／天火明の日高見国と東都  
 ①(帯方)郡より倭に至るには、海岸に沿って水行し、韓国をへて或いは南し、或いは東して、その北岸狗邪韓国に至るまで七千余里。

②(狗邪韓国より)はじめて一海を渡り、千余里にして对馬国に至る。

③また一海を渡ること千余里、・・一大(壹岐)国に至る。

④また海を渡り、千余里にして末盧国に至る。

⑤東南に陸行すること五百里、伊都国に至る。

⑥東南して、奴国に至るまで百里。東して、不弥国に至るまで

百里。

⑧(狗邪韓国より)南して投馬国に至る、水行二十日。

⑨(狗邪韓国より)南して邪馬臺(台)国に至る、女王の都する

所にして、水行十日、陸行一月。

⑩次に奴国ありて、これ女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗

奴国ありて、男子を王と為す。女王に属さず。

其の八年、太守王頌、官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王

卑弥呼と素より和せず。倭の載斯・鳥越などを遣わして郡に詣

らしめ、相攻撃するの状を説く。塞曹掾史張政等を遣わし、よつ

て詔書・黄幢を難升米に拝受せしめ、檄をつくりてこれを告諭す。

☆第二次大戦後、中国では、「史記」から「明史」に至る二十

四史の整理・出版事業が始まった。この事業は中華書局と大

学の連携の下、一字一句まで吟味されて四半世紀後にようや



く完成した。従って余ほどの理由がない限り一句一字たりとも違えるべきでない。

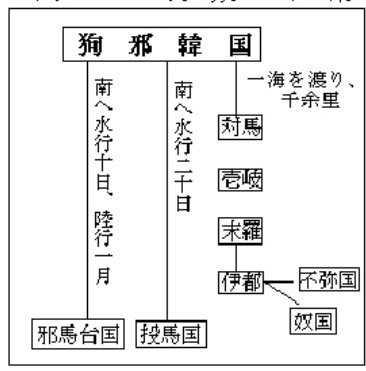
①⑥を地図上で追っていくと、末盧国は唐津、伊都国は佐賀平野、奴国は筑後川南の旧山門郡・旧大和町辺りに到る。伊都国のあった佐賀平野には、後世の国府が置かれた旧大和町、徐福を祀る金立神社、吉野ヶ里遺跡がある。

⑧⑨については、狗邪韓国を起点にとると、本書の筋書き通り、投馬国は宮崎県西都市妻地区、邪馬台国は奈良盆地の大倭(大和)に到達する。

後者の国域は琵琶湖以南の南近畿一帯、すなわち滋賀県や京都府の南部、大阪府・奈良県・和歌山県・三重県の全域、さらに兵庫県南東部に及び、七万戸(約四〇万人)もの人口を擁していた。

☆当時の河内地方には、広大な内海の河内湖が上町台地(大阪城辺り)から生駒山麓にかけて広がっていた。淀川上流の宇治地方には巨大な巨椋湖があり、その北に琵琶湖が横たわっていた故、邪馬台国はさながら大きな島のごとく思われた。

ここに於ける対馬、伊都国、邪馬台・倭、大倭、投馬については、同じ読み漢字、同じ読みの地名・国名が「記紀」や神社名にもあり、対馬、伊都・巖、倭・日本・大和・山門、大倭・大日本、妻・都万と呼ばれてきた。対比してみよう。



対馬国↓長崎県対馬 投馬↓西都市大字妻、西都市大字妻の都万（都萬）神社

伊都国↓「**記紀**」の伊都之尾羽張、伊都之尾羽張劍、嚴之尾羽張、稜威雄走、嚴姫いつのおほしり

邪馬台国、倭↓「**記紀**」の倭・日本、奈良県の大和国、筑後川南の旧山門郡・旧大和町

大倭↓「**記紀**」の大倭・大日本、奈良県の大倭神社

双方を見比べると、「倭人伝」記載の国々が実在した地名に基づいているのは明白である。これは取りも直さず、「倭人伝」や「**記紀**」の信憑性がすこぶる高いことを証明している。

これらを踏まえた上で、この時代の歴史について、このように考えた次第だ。

《大乱前、日隈（熊野家）の伊弉諾は、北九州に都する倭奴国（倭国十豊葦原中つ国（奴国）、天地）王朝の六代女系天神・天之尾羽張から東方統治と共に、神国・常世づくりを託されたが、四苦八苦してきた。将にその時、常世思想に加えて仏教や学問に並外れた才のある大穴持（天竺や天台山から飛来したマガダ国王、山王、牛頭天王）が豊葦原中つ国王にのし上がってきた。

〔**熊野権現の事**〕、甲寅の年に唐の靈山より王子晋の旧跡が日本の鎮西豊前国の彦根大嶽（英彦山）に天降り、神武天皇の治世四三年壬寅に熊野権現として顕れた。権現は天照大神の頃の人で、全国に広く示現されている。その後、本朝に仏教が渡来したが、まだ幽微であった。

〔**熊野権現垂迹縁起**〕、天竺のマガダ国王は、妃たちが起こした惨事を嘆いて王位も国も捨て、「我が身はどこへ行けばよいのか決めかねている。この劍を投げて、落ちた所に行こう」と言って五本の劍を北に向けて投げ、空飛ぶ黄金の車に乗って追いかけた。五本の劍は小さな小さな日本秋津島に飛んで行き、一本は紀伊国牟婁郡神藏（神倉山）、一本は筑紫の英彦山・に留まった。

伊弉諾は彼の噂を耳にするや、天竺を凌ぐほどの常世づくりを実現したいと目論み、養子に取り込んだ。ついで向津姫（六代女系天神の宗女）の婿養子に押し込むと同時に、日隈（熊野家）の皇太神と月神（月読命）に据え、東方を管轄する副都月の都、唐古（田原本町）の経営を任せた。

だが皇太神は、オロチ三輪大物主・水穂殿之國ら畿内勢と盟約して、オロチ殿之國王朝を再現した邪馬台國（瑞穂の殿之國王朝）を月の都に建て、天照大神と僭称して東海から北九州まで瞬く間に席卷した。その結果、伊弉諾も向津姫も素戔嗚も、南國の熊襲に逃げ落ちる他なかった。

その後の天照大神は、三輪氏と太氏、大神家、水神と火神を尊ぶ諸々の瑞穂國や水穂國、海神族・鴨族らの上に君臨すると、天叢雲劍（中細銅劍）を天璽にかざしながら水天神、天叢雲、倭大物主、大蛇・小蛇と語り、邪馬台國方の國々を思うままに操ってきた。

邪馬台國の興亡を振り返ると、①建國当初、水天神の天照大神が唐古に都した瑞穂殿之國王朝、②二〇年代中頃から、日・水の神を奉る倭女王ヒミコが纏向に都する天（殿）之國王朝（倭國）、③二五〇年代前半からは、火明饒速日（海幸彦、三代垂仁）が日と瑞穂の天神に立つ日本王朝に移り変わったが、三世紀末、日向から東征した磐余彦率いる東征軍に敗れ去った。

この経緯を踏まえつつ大倭、高天、出雲、南九州に目をやると、その國の歴史が垣間見える。大乱前の大倭では、大倭家が月の都唐古に副都して東方統治に勤しんできたが、大乱最中に天照大神に戦わずして跪いた結果、三輪大物主と太氏の共立した大神家にとって代わられた。

臣下に成り下がった大倭家は、人質として送られてきた伊弉諾嫡子の子（蛭見）を推戴して商売繁盛の神として崇めつつ、租税の徴収や管理、國々の市場監察など閑職に甘んじてきた。

「倭人伝」、「租賦を収むるに邸閣あり。國國に市あり。有無を交易し、大倭をして監せしむ」  
 ☆蛭子にちなんだ恵比須神社（桜井市三輪）も箸墓辺りの大市の地名も、この市に由来する。

**〔三輪恵比須神社〕**（奈良県桜井市三輪）、祭神は八重事代主命、八尋熊罴命ら。市場の守護神、日本最初の市場の神、神託を司る神として崇敬されてきた。日本初の市場、海石榴市（椿市）は、三輪山南麓の金谷地区を流れる初瀬川べりで物々交換の場として開かれた。

大乱後、高天の高千穂宮では、六代女系天神の宗女、向津姫が日神の天照大御神に担がれるや、

臣下らは石窟戸前で八咫鏡二面（日前鏡と真経津鏡）を鑄造して、真経津鏡を天璽に奉献した。攝津と播磨には、豊葦原瑞穂国や国主取り替え癖のある三島鴨族が深く広く根を張っていた。

前者は、かつて豊葦原中つ国が淀川中流域に策封した分家だったが、大乱最中に本家と袂を分かつて天照大神にすり寄り、瑞穂蔽之国王朝建国に一役買った結果、重鎮に取り立てられた。

淀川中下流域に割拠する三島鴨族は、火神の面足神を六代倭王に担いで栄華を誇ってきたが、伊弉諾政権に移るや右往左往した。当初は火神で山の神の大山祇、次に伊弉諾妻子の火軻遇突智、再度大山祇を推戴したが、大乱で天下がひっくり返るや、勝ち馬の天照大神に乗り替えた。

同じ頃の出雲では、豊葦原中つ国が豊国と葦原中つ国に割れる寸前であった。

素戔嗚は高千穂宮から新羅に出奔した数年後、奥出雲に潜入して出雲熊野家と豊葦原中つ国の再興に奮闘したが、オロチ佐太国に養子に出した妻子大己貴（大穴持襲名）に悉く妨害された。その最中に、豊国は一族郎党ともども出雲から去り、丹後、摂津、尾張に移ったらしい。

『日本書紀』、「然して後に、素戔嗚尊、櫛稲田姫に生ませたまえる児を大己貴と号す」、

一一〇年代前半、大己貴は葦原中つ国再建を果たすや、越（高志）オロチ勢と組んで邪馬台国を西と北から執拗に攻め立てた。ところが二二〇年代初め、彼は高阜産霊の送り込んだ遠征軍に戦わずして屈服し、天神の御子に国譲りすると誓わされた。

福岡平野の那珂川中流域では、縄文期の那珂つ国を継承した中つ国一門が周辺の新参者に所領をちびちび削り取られながらも国体を維持してきた。

福岡平野西の糸島平野には、一世紀前半以来、倭奴国王朝が怡土井原に天宮して数多の官民に守られてきたが、大乱後にその大多数が四散した。家臣に逃げられた王朝一族は西の平原にひきこもり、時節到来を待つ他なかった。

【平原遺跡墳丘墓】（福岡県糸島市）、巨大な方形周溝墓の木棺外部から鉄製の素環頭太刀一

本、ガラス製勾玉・メノウ製管玉多数、ネックレス・ブレスレット・イヤリングなど装身具、破断された四〇面分の鏡（方格規矩鏡三二、径四六・五センチの内行花文鏡五）などが出た。

そこには、三角縁神獸鏡は一枚も存在しない。周溝の土壙墓からも鉄鏃・鉄刀子が出土した。

この王墓は厳之国の尊ぶ方形墓であるものの、副葬品として天之国祭器の鉄剣、数多の方格規矩鏡、厳之国の称える巨大な内行花文鏡数面分の破片が添えられていた。築造時期は、二〇〇年頃とする見方が有力だ。そうだとすると、墓主は天之国の権力者として大乱に関わってきたことになる。調査主任だった原田大六氏は、副葬品の内容から女性の墓と睨んでいた。

一方、糸島平野から古巣の吉野ヶ里に押し戻された伊都国は、天之国六代天神、天之尾羽張の愛児を王に推戴した結果、再度蘇ったが、大乱時に敵軍に包囲されるや、あつさり跪いた。その後は、敵の指示を仰ぎつつ内外濠を掘り下げて各所に物見櫓を建て、西海一の砦に変貌した。

二二〇年代前半、則ち日神が天孫火瓊杵に吾田降臨を命じた直後、夫の高阜産霊（天照大御神に大政奉還して高千穂宮に赴く天照大神、所造天下大穴持）は大倭に向かった。道中の出雲や丹後で、皇孫天火明と大己貴を連れて大倭に戻ると、天火明に丹後・尾張の統治、常世づくり、大倭日高見国の建国、さらなる東の領土拡大を命じる一方、自身は仏法や常世思想、磐座信仰、神仙の国・蓬萊郷づくりを散りばめた所造天下策に乗り出した。

それ以前から、天照大神は海神から天照大神旗下に鞍替えした出雲の豊葦原中つ国、尾張の海部家本家、丹後の海部家分家を四方に睨みを利かす重鎮に持ち上げる一方、嫡子天羽羽を出雲と尾張に、その見天火明を丹後海部家家長に据えた。この時代、天照大神に伏した豊葦原中つ国は倭奴国王朝建国の祖、厳香具土の襲名を天羽羽に譲った結果、天羽羽は天鹿兒山と語ってきた。

その彼が奥出雲山中で素戔嗚に不意打ちされたことで、その見の天火明が丹後・尾張の両海部家、さらに日高見国に君臨し、その孫の天香山も天火明名代として尾張を統治してきた。





「出雲国造神賀詞」、「大穴持の申し給わく、『皇御孫尊の静まり坐さむ大倭国』と申して、己の和魂を八咫鏡に取りつけ、倭の大物主、櫛甕玉尊と称えて大御和の神奈備に坐せ・・」河内では、薩摩から舞い戻った天児屋が生駒山西麓に領地を賜り、女王の祭祀を助けてきた。

二二〇年代後半、天火明(三代垂仁)は経津主・武甕槌・事勝国勝(塩土老翁)ら大軍を引き連れ、武蔵、常陸、仙台平野を席卷して陸奥国(福島県)宮城県松島あたり)まで国域を広げた。

その直後、女王ヒミコは天火明率いる日高見国を千葉県市原市に国替えして東都を開かせた。

〔神門(こうど) 五号墳説明板(千葉県市原市教育委員会、平成二六年三月) 要旨〕、「邪馬台国時代の西暦三世紀になると、汎列島規模で地域間の交流が活発になります。

この時期、国分寺台地区の中台遺跡、南中台遺跡、長平台遺跡、天神台遺跡などでは、近畿地方(奈良県、滋賀県周辺)や北陸地方(福井県周辺)、東海地方(愛知県、静岡県周辺)、北関東地方(茨城県、栃木県周辺)などの特徴を持った土器が出土し、こうした地域からの移住や交流の地として、国分寺台地区は東日本でも拠点的な地域となりました。

これらの遺跡群を中核とした地域統合の象徴として、神門古墳群(三号、四号、五号墳)がつけられました。また、遺跡群の中心となる中台遺跡では、祭政の場と推定されている神殿風の掘立柱建築跡も発見されています。幅六メートルの周濠がめぐる古墳群中最古の五号墳は、墳径三〇～三二・五メートル、高さ五メートルの後円部と、その西側の長さ一二メートルの前方部からなる全長四二・六メートルの前方後円墳です。前方部は短小であり、こうした墳形は、前方後円墳が定型化する以前の特徴です。

このような古墳は、奈良県桜井市纏向古墳群を中心とし、全国的にも数が限られており、五号墳は東日本において最古の古墳です。三世紀前半の造墓と推定されています。

神門五号墳は、市原における国づくりの過程を明らかにするだけでなく、古墳発生と前方後円墳の起源を考える上できわめて重要な古墳です」

☆考古学的にも、市原市惣社地区は三世紀前半の纏向地域を縮小した副都のごとき様相を呈しており、その時期も、大倭日高見国を建てた天火明の全盛期に相当する。

「倭人伝」、女王国の東、海（伊勢湾）を渡ること千余里にして、また国あり、皆倭種なり」一方、薩摩吾田に降臨した火瓊瓊杵は、笠沙宮に都して日隈（日前）を再興するや、女神大山祇の娘、木花開耶姫に会い、妃に娶った。

数年後、彼は日向の西都市妻に遷都すると、日前を日前に改名した。ついで木花開耶姫率いる女神大山祇国（妻の国）を呼び寄せた。この国こそ、「倭人伝」の投馬国なのだ。

〔三宅神社〕（西都市三宅）、火瓊瓊杵の皇居跡とされる。祭神は、天津彦火瓊瓊杵尊。北東一ノノに木花咲耶姫を祀る都万神社が鎮座する。北一ノノに、日本屈指の西都原古墳群が広がる。

〔都万（つま）神社〕（西都市大字妻）、祭神は桜を神木と崇める木花開耶姫命。神社近くには二人が新婚生活を送った八尋殿の跡や、姫が出産後に沐浴した子湯池があり、子湯郡の地名も残る。西都市妻地区は奈良朝にいたるまで日向の中心地として栄え、近くに国分寺跡もある。

ここに、女王が纏向一之宮に都して倭国を直轄しながら、東に天火明率いる日高見国の東都、西に火瓊瓊杵率いる日前（投馬国）の西都を間接統治できる国体が整った。

一三〇年代に入ると、ヒミコは吉野ヶ里の伊都国に鉄剣を振りかざす天（厳）軍の常勝將軍・武甕槌、吉備軍・オロチ諸軍を常駐させて熊襲の北上に備える一方、副都としても利用してきた。

武甕槌將軍は刺史や大目付のごとき権力をかざしながら、西海中に目を光らせた。吉野ヶ里遺跡から鉄刀や鉄剣、畿内系・吉備系の土器が多々出てくるのは、これがためだ。

この地は南国の動静が素早く察知できる上に、万が一、熊襲が北進して来ても筑後川で遮ることができた。この城郭の人々は常勝將軍の指図に従い、河や湖沼を船で巡回しつつ、近隣集落の管理に当たってきた。対馬や壱岐を通じて大陸との往来がある際には、そのつど唐津や那珂津に出

向き、送迎や荷の点検を行った。

「倭人伝」、「伊都国に到る。・千余戸あり。世よ王あるも、皆女王国に統属し、郡使の往来に常に駐まる所なり」、

「女王国以北には、特に一大率を置き、諸国を檢察せしむ。

諸国、これを畏ればはかる。常に伊都国に治し、国中において刺史の如きあり」

☆「倭人伝」にある「一大」や邪馬台国の「壹」の語が隠し言葉であるのは、容易に察しがつく。魏では、天(天子を指す語)や臺(天子が政を行御殿)は天子のみに許される漢字だった故、「倭人伝」の編者は「天」を「大」に、「臺(台)」を「壹」にあてる他なかったのである。

【吉野ヶ里遺跡】、後期前半(倭奴国王朝初期)、丘陵全体を巡る外濠が完成して、内濠も巡った。ここに、天之国軍が進駐してきたらしい。後期後半(日本王朝期)、環壕内に望楼が建った。全体の広さは二五畝もあって、当時としては最大。

唐津辺りにあった松浦国は大陸との中継地として栄えたが、田畑が少なくことで四千戸の家々しかなかった。多くの人は海沿いの狭い土地にへばりつき、専ら漁業で生業を立ててきた。

伊都国の東南百里には、戸数二万ほどの(倭)奴国があった。この国は、倭奴国王朝の官民や那珂川流域の中つ国勢が伊婁諾を慕って南下する中、山門郡・大和町辺りに足止めされ、やむなく立てた国主無き国だった。そのため、「倭人伝」に奴国と記された。つまり「倭人伝」の奴国の国







しぬ。亦曰わく、淡島（友ヶ島淡島か志摩粟嶋）に至りて粟莖あむがらに縁のぼりしかば、弾はじかれ渡りまして常世郷に適しぬ」

〔潮御崎神社〕（和歌山東牟婁郡串本町潮岬）、祭神は、少彦名命。『記紀』にある熊野御碕は少彦名命が常世国に渡り給うた聖地で、景行期に御崎の静之窟内に勧請したことに始まるという。その後、静之峯、潮見の端に遷座したと伝わる。

『常陸国風土記』、「古の人、常世の国と言へるは、蓋し疑うらくは此の地ならむか」

『日本書紀』や万葉集引用の『常陸国風土記』逸文、「この地（信太）は、もと日高見国」

『景行紀』、「竹内宿禰、東国より還て奏して言さく、『東の夷の中に日高見国あり』」

「日本武尊、陸奥国に入りたまう。・・蝦夷既に平けて、日高見国より還りて・・」

☆「ホツマツタエ」は、日高見国が仙台辺りに都した王国と伝える。

先の約定に沿って、大倭に降臨した海幸彦（火明饒速日、三代垂仁）はヒミコが他界するや、独り日本朝に君臨して、ヒミコの宗女で天火明遺児の豊鍬入姫（トヨ）を女王に立てなかつた。

結果、素戔鳴一門とにらみ合う泥沼抗争に陥つた。この争いも、火明遺児の豊鍬入姫を二代女王に担ぐことで漸く鎮まった。結局、南国も東国も倭国も、火瓊瓊杵勢一色に染まったわけだ。

『日本書紀』、「（大己貴神、）遂に出雲に到りて、・・言わく、『今此の国をおさむるは、唯し吾一身のみなり。其れ吾と共に天下をおさむべき者、蓋し有りや』とのたまう」

「時に、神しき光海に照らして、浮び来る者あり。・・大己貴神問いて曰はく、『然らば汝は是誰ぞ。・・今何処にか住まむと欲う』とのたまう。対えて曰わく、『吾は日本国の三諸山に

住まむと欲う』という。これ、大三輪の神（日本大物主大神）なり」

『但馬故事記』、「（火明）饒速日は勅と瑞宝十種を奉じて妃の天道姫・数多の隨身を率い、丹



波の真名井原（籠神社奥宮の地）に天降った。そこで豊受姫からもらった五穀や桑の種を植えつけた。井戸を掘ったり、田畑を開いて蚕を育てたりした。

豊受姫はこれを見て大いに喜び、田つくりの手伝いにと天熊人を遣わした。後に、饒速日はそこから河内生駒に天降った。天道姫が丹波で産んだ児を天香語山、その児を天村雲という。

【海部氏系図勘注系図】始祖彦火明 一 児天香語山 一 孫天村雲 一  
「垂仁紀」、「冬十月、纏向に都つくる。是を珠城宮と謂う」

その後の大倭家は、火明饒速日に絶対的服従を誓うと同時に家名も大日本家と改めた。その結果、軍事筆頭職に返り咲き、さらに唐古や葛城に都することも、天皇と語ることも許された。

一六五年、司馬炎が魏帝を廢して晋を建国した。

翌二六六年、女王トヨが晋に朝貢した直後、火明饒速日は箸墓を泰山に見立てて郊祭し、自ら天神に昇った。その後、南国勢を熊襲と呼んで蔑み、仇同然に敵視し始めた。

〔鏡作神社（鏡作坐天照御魂神社）〕（田原本町大字八尾）、祭壇中央に天照国照彦天火明命を祀り、左右に石凝姥命と天糠戸命（石凝姥の親神）を配して、天照国照彦火明命なる八咫鏡を御神体として祀る。社伝に、「（崇神天皇六年九月三日、）この地において日御像の鏡を鑄造し、天照大神之御魂（社名から推察して天照御魂神？）となす。今の内侍所の神鏡是なり」とあるそう。

同時に、大己貴（国作大己貴、大神大物主）に天下を治める国づくりを命じた。数ヶ月後、大己貴は主人やヒミコの意向を押し量りつつ、大神家と大日本家が結束して日本朝を支える体制を立ち上げるや、自ら最高職に留まった。その天下の国づくりとは、纏向宮や大倭国を国ん中として囲む形で、西海道・山陽道（西道）・山陰道（丹波道）・北陸道（越の道）・東山道・東海道（東の方の十二国）・南海道など七道に区分してそれぞれに都督（道主）を置き、連邦制のごとく統治することになった。

詳しく言うと、西海道には筑紫島、山陽道には瀬戸内海沿いの播磨から長門まで、丹波道には山城・丹波・丹後から西の日本海沿い、北陸（高志）道には若狭・越前・近江北部が組み込まれた。東山道には近江南部・美濃・信濃・毛野など、東海道には熊野東部・志摩・伊勢・三河・遠江・駿河・伊豆・相模・武蔵・甲斐・総・常陸などが編入された。南海道には、愛媛・土佐など四国および紀伊・熊野西部が割り当てられた。

この時期、火明饒速日（海幸彦）は火火出見（山幸彦）に命乞いして謝罪した昔の喧嘩沙汰を思い出しては火火出見を熊襲と呼んで蔑み、武力一辺倒の趣旨返しを画策し始めた。

二七〇年代後半、景行と彦狭嶋は天神から熊襲征伐を詔されたが、大敗して六年も捕らわれた。

「景行紀」、「（四年）、纏向に都つくる。是を日代宮と謂す」、「十二年、熊襲反きて朝貢らず。日向国に到りて行宮を起てて居します。是高屋宮と謂す。十二月、熊襲を討たむことを議る」、

「彦狭嶋王を以て、東山道十五国の都督に拜けたまう。是豊城命（豊鍬入姫の兄）の孫なり」

『予章記』、「孝元天皇の御弟を彦狭嶋と称す。・・時に南蛮西戎（熊襲）の凶徒等動ずれば、蜂起するの間、皇子、鎮護国家のために当国に止住し給うを、西南藩屏將軍と宣下せらる」

二七〇年代末、天神は仲哀に西海道都督を下命すると同時に、天皇の称号も許した。

☆この時期、天神の垂仁、倭王の景行、都督の仲哀が揃って天皇と呼ばれたことになる。

二八〇年代前半、熊襲征伐を詔された仲哀は、檀日（福岡市）に副都して熊襲征伐に撃って出た。

「仲哀紀」、「天皇、強に熊襲を撃ちたまう。得勝ちたまわずして還ります」

二八五年七月末、磐余彦（神武天皇）率いる東征軍は、火明饒速日を討つべく日向を発った。

「神武紀」、「塩土老翁に聞きき。曰いしく、東に美き地有り。青山四周れり。其の中に亦、

天磐船に乗りて飛び降る者有り」といいき。余謂うに、彼の地は、六合の中心か。その飛び降るといふ者は、是饒速日と謂うか。何ぞ就きて都つくらざらむ」とのたまう」

## ◇男神天照大神の正体 1

「熊野権現垂迹縁起」、「天竺のマガダ国王子は、妃たちが起こした惨事を嘆いて王位も国も捨て、『我が身はどこへ行けばよいか決めかねている。この剣を投げて、落ちた所に行こう』と言って五本の剣を北に向けて投げ、空飛ぶ黄金の車に乗ってこれを追いかけた。五本の剣は日本に飛んで行き、一本は紀伊国牟婁郡神藏(神倉山)に、一本は筑紫の英彦山に、一本は陸奥中宮山に、一本は淡路の和(遊鶴羽峰)に、残る一本は伯耆大山に落ちた。大王の車は、五本の剣を追いかけて英彦山に到った。その後各地を転々として、最後は紀伊国牟婁郡に留まった」

『神道集』熊野権現事、「唐の天台山の地主神・王子信が鎮西英彦山に天降った。ついで伊予の石鎚峰から淡路の遊鶴羽峰に渡り、さらに熊野の神倉峰に降って、神武天皇御世に熊野権現として垂迹した」、「天照大神の頃の人であるが、示現された土地は全国に広く行き渡っている」

「地元の伝説」、「神武天皇は熊野の賊を退治できたことで、神倉山の頂きに登って十握剣(一説では経津御魂)を捧げ持ち、天照大神(一説では高皇産靈)にお礼の言葉を申し述べた」

「熊野縁起」、「熊野権現は、伊勢太神と同体である」

『出雲国風土記』は杵築大社について、「神々たちが集まり、所造天下大穴持のお宮を造った」、意宇郡出雲神戸条、「伊弉諾の真名子・熊野櫛御氣野、所造天下大穴持の二三所の大神に献じ祀る民戸」、島根郡加賀郷条、「佐太大神のお生まれになった所」

「神事芸能」大社の段、「天照大神の生所とするために、加賀の潜り戸と名づけたり」

「三輪山縁起」、「当社と伊勢は一体異名炳然なり」、「大己貴(大穴持であろう)尊の三輪への降臨は、伊勢より早く神代のこと」、「当社大明神と日吉山王は同体」、「三輪大明神は大日如来と同体」

「伊雑宮」、徳川期の朝廷や将軍に訴状を出し、こう主張してきた。

「伊雑皇大神宮は日本最初の宮であり、後に内宮ができ、ついで外宮ができた」、

「当宮は天照大神を祀り、内宮別宮(天照大神の遥宮)である。伊勢太神は当地から遷された」

〔熱田神宮〕、天璽だった草薙剣を祀る。主祭神は、熱田大神。相殿の神は、天照大神、素戔鳴尊、日本武尊ら五柱。草薙剣（一説では天叢雲剣）は、大日如来（一説では天照大神）の姿とする。

明治期以降、神宮や明治政府の見解では、熱田大神は草薙剣を依り代とした天照大神と見ている。

〔熱田縁起〕、「熱田明神は、熊野権現、伊勢太神と一体分身である」、

「熱田明神の大日如来は、天照大神であり、天叢雲剣にほかならない」

〔真言宗本地垂迹説〕、内宮の天照大御神⇨胎藏界の大日如来、外宮の豊受大神⇨金剛界の大日如来

〔日吉大社〕、東本宮の大山咋より、東本宮の大己貴（大神神社から勧請。大穴持？）を上位と見る。

〔山王神道〕、山王権現⇨釈迦の垂迹と見る。

〔伊勢神道〕、豊受大神⇨天御中主、国常立とし、内宮の天照大御神より上位にあった神とする。

〔山王一実神道〕（家康に仕えた僧天海が提唱）、「山王権現は大日如来であり、天照大神である」

〔牛頭天王・観音菩薩〕、ゾロアスター教以前から、イラン高原に住むアーリア人は、ミトラ多神教を信奉してきた。太陽神の女神ミトラは、救世主、契約を司る神としてギリシヤ・インド、ヘブライ社会、キリスト教に姿や形を変えながら広まった。彼女は牛の角を生やした兜をかぶっていたという。

前三世紀に興ったパルティア国（二三世紀）は宗教に寛大だったことで、ゾロアスター教、部派仏教上座部に属する説一切有部、ミトラ多神教が流行していた。

インド神話におけるミトラ神も、契約の守護神だった。仏教の観音菩薩（救世菩薩）や弥勒菩薩の救世的な性格は、ミトラ神から受け継ぐらしい。祇園精舎守護神で、頭に牛の角を生やした牛頭天王の性格も、ミトラ神に由来するという。我が国でも、牛頭天王が広峰神社西の白幣山山頂に鎮座する磐座に天降った伝承や、知恩院黒門前の瓜生石なる磐座に降り立った伝説が語り継がれてきた。

この牛頭天王（サンスクリット語や呉音では牛、大和言葉では頭と発音⇨仏陀ゴータマ）こそ、天竺から飛来して仏陀ゴータマの再来と語った人物に相違なかるう。

〔**籠神社**〕、本宮に彦火明命、相殿に豊受大神・天照大神・海神らを祀る。神代の鎮座地は眞名井原。そこに鎮まる奥宮（眞名井神社、外宮元伊勢）は、豊受大神を祀る。かつて天照大神を祀ってきた与佐宮は内宮元伊勢とされる。

七十九年、現在地に遷座して社名を籠神社、主祭神を彦火明命に改めた。

〔**熊野権現と伊勢太神、同体か否かの議論**〕、後白河院が熊野行幸を始めた一一六〇年の三年後、議論が沸騰した。結果はこれを否定するところに落ち着いたが、果たして、そうだろうか。

〔**法皇熊野那智山御参詣事**〕、花山法皇が熊野の那智山に籠って千日修業していると、彼のもとに籠神が降ってきて、如意宝珠・水精の念珠・九穴のアワビを献じた。このアワビを食すると、不老長寿が叶うとされてきた。

法王はその宝珠を岩屋に、念珠を千手院に納め、アワビを那智滝の滝壺に沈めさせた。九穴のアワビを食した者だけが不老長寿になるよりも、滝の水を口にすると全ての人が延命になるようにと願ってのことらしい。後世、このアワビの一件を耳にした白河上皇が滝壺を探らせると、今なおアワビは生きていて、三尺ばかりの大きさに成長していたという。

〔**神在祭**〕、陰曆十月、出雲大社と佐太神社がとり行う儀式で、竜蛇神なる神のお使い（荒れた海から浜辺に打ちあげられる背黒海蛇）が南洋から島根半島に遠路やって来て、丁重に迎えられる。

☆出雲大社の御神体は、本殿の奥深くに鎮座しており、千古の神秘として何人たりとも拝することは罷りならず、そのため祭司・出雲国造たる千家宮司も御存じないという。

〔**雲陽秘事記**〕、「松江藩城主・松平直政（家康の孫）が出雲大社に参詣した折、国造の制止を聞かずに無理やり御神体を覗き見ると、それは九穴のアワビのようだったが、たちどころに巨大な大蛇（八岐大蛇、天叢雲剣を天璽に奉るオロチの天照大神？）に変身した。直政は畏れて逃げ出した」

〔**天照大神男神説**〕、伊勢神宮に納める天照大神の装束↓男性用。祇園祭岩戸山の天照大神↓男性

◇男神天照大神の正体2 「熊野権現」

天竺の常世思想が我が国に流れ来たったのは、シュメルに繋がるドラヴィダ系アーンドラ王朝やマガダ国と何らかの接触があつたことだろう。

「解説編」「倭国と天竺のかかわり」の中で述べたごとく、バラモン神の教え以外にも、マガダ国大王にまつわる逸話が『神道集』に「熊野権現の事」として記されている。熊野でも、天台山山王に昇りつめた御仁が我が国に飛来して、神武天皇御代に熊野権現となつて顕れたとする「熊野権現垂迹縁起」が伝わっている。

『神道集』熊野権現の事と「熊野権現垂迹縁起」の要旨

甲寅の年に唐の靈山より王子晋の旧跡が日本の鎮西豊前国の彦根大嶽(英彦山)に天降つた。その形は、高さ三尺六寸の八角の水晶であつた。その後、各所で長い年月を送つた後、神武天皇の治世四三年壬寅に熊野権現として顕れた。そのまた後、本朝に仏教が渡来したが、まだ幽微であつた。それから三百余年を経て、四十余代の帝の御代、役行者と婆羅門僧正が参詣して本地を明らかにした。権現は天照大神の頃の人で、全国に広く示現されている。

一、天竺のマガダ国大王は、妃たちが起こした惨事を嘆いて王位も国も捨て、「我が身はどこへ行けばよいのか決めかねている。この剣を投げて、落ちた所に行こう」と言つて五本の剣を北に向けて投げ、妃や王子と一緒に空飛ぶ黄金の車に乗つてこれを追いかけた。

五本の剣は天竺や中国には留まらずに、小さな小さな日本秋津島に飛んで行き、一本は紀伊国牟婁郡神蔵(神倉山、熊野速玉大社の旧社地)、一本は筑紫の英彦山、一本は陸奥の中宮山、一本は淡路の和(遊鶴羽峰)、残る一本は伯耆大山に留まつた。大王の車は、五本の剣を追いかけて英彦山に到つた。そこから各地を転々として、最後は第一の剣に従つて紀伊国牟婁郡(熊野)に留まつた。大王はこの国に来て、七〇〇〇年間、姿を顕さなかつた。



一、唐の天台山の地主神・王子信が鎮西英彦山に天降った。その者は高さ三尺六寸で八角の水晶形をしていた。ついで伊予の石鎚峰から淡路の遊鶴羽峰に渡り、さらに熊野の神倉峰に降った。  
 「**地元の伝説**」、「神武天皇は熊野の賊を退治できたことで、神倉山に登って十握剣（一説では布津御魂）を捧げ持ち、天照大神（一説では高皇産靈）にお礼の言葉を申し述べた」

☆王子信については、天台山から飛来する山王として厚く尊敬され、中国はもとより奈良・平安朝の文人らにもなじみ深い人物だった。

「**天台山**」、天台山は浙江省東部の天台県北方、二キョウに聳える霊山。古くは、神仙（天台道教）の霊山として名をなしていた。

五七五年に、智顛らが入山して天竺直伝の法華経を唱えて根本道場としてからは、仏教の中心地に成り変わった。平安初期に入唐した最澄は、天台山で法華経・達磨系禪宗などを修めた後、比叡山に寺院を建立して天台宗として教え広めた。その護法神にあたる日吉神社は、大山咋神（大歳神の兒、素戔嗚の孫）を山王として祀ることで、山王とも山王権現とも呼ばれた。

邪馬台国期の国のかたちをバラモン神の教えに沿っているのも、日神が天上に君臨したごとく振る舞うのも、スメラミコトの呼称がシュメルやスメラ山に由来するのも、さらに牛頭天王が仏陀ゴータマと読めるのも、天竺のマガダ国大王が我が国に流れ来ったからに相違あるまい。

このマガダ国大王は、江南に聳える天台山道教の山王に担がれた後、豊葦原中つ国の大穴持や大國主に昇りつめた。さらに伊弉諾の養子に入って豊受皇太神と語り、仏法流布や常世づくりに入れ込むらしい。ではいつ頃、何処に流れ着くのか、どう動いたのか、以下から見通せるはずだ。

伊勢神道によると、豊受（天照）皇太神と日神は、伊弉諾の兒として外内宮の主座（伊勢大神）に鎮座している。ならば、皇太神は日神の天照大御神とも同等の地位にあって然るべきだが、なぜ「記紀」にその名が出てこない。ヒミコの名もわかりだ。

筆者は邪馬台国の最重要人物であるこの二神について、その事績を明らかにして実態に迫りたいと奮闘努力した。その結果、以下のことが明らかにになった。

①豊受（天照）皇太神は「記紀」にその名が見当たらないものの、伊勢神道や真言密教の本地垂迹説、あるいは古社の縁起では頻繁に登場してくる。それだけではない。彼は天照大神の異名も有しており、日神より上位の神とされてきた。

外宮の伊勢神道や石上神道の伝えるところでも、天照大神は男神とされてきたし、学識の間でも「女神の天照大神以前に、男神の天照大神が存在した」と説く向きがある。

にもかかわらず、『古事記』の天照大神も『日本書紀』の天照大神も、女神だけのごとく記されてきて、男神天照大神と匂わせる記載は一切見あたらない。それは、次のことに起因している。

「彼は伊弉諾太子でありながら大乱の引き金を引き、倭奴国王朝を転覆させた。それ故、帝紀や旧辞から抹殺された。だが彼の血を引く「記紀」の編纂者たちは、女神天照大神の事績に男神のそれを密かにつけ足した。我々はそれも女神の事績と思いつまされてきた」

②ここで、熊野権現や皇太神すなわち天照大神の生い立ちについて考えたい。これを解く鍵はほぼ揃っている。熊野縁起は「熊野権現は伊勢太神と一体である」とし、熱田縁起もこう伝える。

「熱田明神は、熊野権現、伊勢太神と一体分身である」

「熱田明神の大日如来は、天照大神であり、天叢雲剣にほかならない」

物部氏寄りの『ホツマツタエ』も、天照大神が志摩伊雑に宮を置いていたとする。その伊雑宮（磯部宮、三重県志摩市）は、徳川期の朝廷や将軍に訴状を出して、こう主張してきた。

「伊雑皇大神宮は日本最初の宮で、後に内宮ができ、次に外宮ができた」

「当宮は天照大神を祀り、内宮の別宮（遥宮）である。伊勢太神は当地から遷された」

熊野権現が伊勢太神と同体か否かについては、後白河院が熊野行幸を始めた一一六〇年の三年

後に、議論が沸騰した。結果はこれを否定するところに落ち着いたが、筆者がこれに深く思いを巡らし、心にその意を悟った限りでは、縁起どおりに、熊野権現すなわち天竺のマガダ国大王は、熱田明神、伊勢太神、男神の天照大神に他ならないと断じざるを得なかった。

③次に、彼の生い立ちはどうだったのか。いつの頃に、いかなる事績を挙げたのか。これを解く鍵もほぼ揃っている。その一つは、「神事芸能」大社の段、加賀神社（島根県松江市）に伝わる縁起、『出雲国風土記』「島根郡」の条にある。

「神事芸能」加賀神社の縁起、「天照大神の生所とするために、加賀の潜戸と名づけたり」

☆加賀神社は、伊奘諾・伊奘冉・天照大神・キサカ姫・猿田彦を祀る。近辺には、猿田彦の遊び育った伝説がやたらと残る。

『出雲国風土記』「島根郡」や佐太神社縁起、「（加賀潜戸は）佐太大神の生れましし所なり。母のキサカ姫は『聞き岩屋なるかも』と言って、金の弓矢を持ち射給いし時に、光輝けり」

いま一つは、出雲大社と佐太神社がとり行う神在祭にある。それは陰曆十月の神無月（出雲では神在月と呼ぶ）に、竜蛇神と呼ばれる「神のお使い」が南洋から島根半島に流れて来て、丁重に迎えられる儀式を言った。そのお使いとは、荒れた海から浜辺に打ちあげられる背黒海蛇（腹面が白く背の黒い毒海蛇、インド洋や太平洋に分布）だ。

背黒海蛇が神のお使いとされた所以は、両社の祭神がオロチであること、海蛇の鱗が六角形であること、白一色の胸辺りにぼつんとある黒い鱗が両社共通の亀甲神紋（六角形）に見えることにある。つまり、南洋から海流に乗って流れ来る背黒海蛇の生態は、オロチと呼ばれる天照大神の生国や漂着先を教えているようであり、この御仁を尊ぶ両社の紋つきを羽織った格好までして、神（水天照大神）のお使いとして誠に相応しい生き物なのだ。

④これでわかるように、皇太神の生い立ちは複雑極まりないが、簡潔にまとめると、こうなる。

「中国に渡来した天竺のマガダ国大王は天台山にこもって修行していると、たちまち天台道教の山王に担がれた。二世紀半ば過ぎ、島根半島に流れ来て、加賀潜戸でしばし修行してきた。

それでも、彼の仁徳や非凡さが知れ渡って佐太国の佐太大神や大穴持に、ついで杵築国の大国主に担がれた。さらに豊葦原中つ国の建て直しを懇請された上に、神皇産霊や国常立を襲名して金の弓矢を授かった。

当時、神国・常世づくりに四苦八苦してきた伊弉諾は、大穴持が天竺の常世思想に加えて、仏法と学問に並外れた才があると聞かや、天竺を凌ぐ常世を実現したいとして養子に取り込んだ。同時に彼の後釜として、豊葦原中つ国の祖、いづのかぐつち厳香具土(国常立)につながるかぐつち厳香来雷を担ぎ出した」

その結果、大穴持は伊弉諾の愛児(真名子)となつてとんとん拍子に出世し、豊受(天照)皇太神(皇太子)の位に昇りつめた。その後は、義父とともに仏法流布・常世づくりに走り回った。

当時の国づくりを検証していくと、五帝期や天竺の真似ごとがそこ彼処から見つかるとはならずだ。⑤これらを総合して、以下の事績にたどり着いた次第だ。

「天台山山王に昇りつめたマガダ国大王は、島根半島に飛来して山王、牛頭天王、神皇産霊、佐太大神、大穴持、大国主と語った後、豊葦原中つ国王に駆け上った。大乱前に伊弉諾の養子となつて月読、熊野櫛御氣野(熊野権現)、御饌津神、次に向津姫に婿入りして豊受(天照)皇太神と語ったが、一八〇年代中頃、義父伊弉諾に謀反して邪馬台国を興し、天御中主、天叢雲、水天神、天照大神、小蛇、倭大物主、大穴持、豊受大神、高皇産霊など名を使い分けてきた」

以下、男神天照大神と深く関わってきた「牛頭天王と磐座信仰」、蓬萊山東麓を舞台とする「白鬚神社と謡曲白鬚／蓬萊郷と仏法・山王信仰の聖地」についても、じっくり検証して行きたい。

これが正しいかどうかは、本物語を読み通して判断して頂きたい。邪馬台国期に天叢雲剣と八咫鏡及び天照大神と天照大神が伊勢太神として齋く祀られた経緯も、すんなり理解できるはずだ。

◇男神天照大神の正体3 「天照大神の足跡」

一世紀前半 ～一七〇年代  
 倭奴国王朝 伊弉諾期  
 初代女系天神**天常立**  
 一八〇年代前半  
 中頃～一九〇年代 二一〇年代 二二〇年代  
 大乱 高千穂宮時代 出雲征伐 天孫降臨、天火明がヨ高見国建国  
 邪馬台国勃興 ↓天照大神、高千穂宮に赴き、高皇産靈と語る  
 高千穂宮で七代天神に昇る 大倭に遷座

天之尾羽張

（嫡流の宗女）

向津姫

↓日神の天照大御神

↓倭の女王ヒメノ

六代女系天神

伊弉諾……………（養子縁組）

（伊弉諾神宮・多賀大社、熊野速玉・那智大社の祭神）

佐太大神（佐太神社祭神）

マガダ国大王↓大穴持、大國主

（出雲大社祭神）

山王（ヨ吉大社本来の祭神）

牛頭天王（祇園社本来の祭神）

石神・神皇産靈

天御中主・国常立

熊野櫛御氣野饒名

素戔鳴（牛頭天王饒名）

（熊野大社・祇園社祭神）

（佐太神社祭神）

佐太御子……………大己貴（大穴持と大國主饒名）

天照皇太神

↓天照大神

↓天鹿見山

鏡速日（磐船神社祭神）

天火明（彦火明、龍神社祭神）

↓神藏山に垂迹する熊野権現

（熊野三山祭神）

御饌津神

大蛇（杵築大社祭神の化身）

月読命・月神

倭大物主（三輪山奥津磐座、ヨ吉大社西本宮本来の祭神）

豊受皇太神

↓豊受大神（龍神社奥宮（真名井神社）・外宮祭神）

（外宮祭神）

天叢雲（熱田大神、天叢雲劍）

高皇産靈（熱田大神、草薙劍）

（外宮祭神）

結局、天竺マガダ国大王は天台山山王に昇ると、出雲に飛来して瞬く間に豊葦原中つ国王にのし上がり、牛頭天王・所造天下大穴持・佐太大神・大國主・石神、神皇産靈・天御中主・国常立と称した。その後、伊弉諾の養子となって熊野櫛御氣野・御饌津神、次に向津姫に婿入りして月読命・月神・豊受（天照）皇太神と語ったが、一八〇年代中頃、義父伊弉諾に謀反して邪馬台国を興し、天叢雲・天照大神・水天神・大蛇・倭大物主・豊受大神、更に高千穂宮に遷座して高皇産靈と名を使い分けた。

◇籠神社と海部氏系図／神武（磐余彦）と神功と志神

〔籠神社〕（京都府宮津市）、主祭神は、彦火明命。相殿に豊受大神、天照大神、海神、天水分神を祀る。眞名井原に鎮座する奥宮（眞名井神社）は神代の鎮座地とされ、豊受大神を祀ってきた。

垂仁天皇の御世、眞名井原の匏宮（与佐宮、与謝宮）に鎮座する天照大神が伊勢国五十鈴の川上（内宮の地）に遷座したという。雄略期になると、眞名井神社の豊受大神が伊勢山田原の豊受大神宮（外宮）に勧請されたことで、両宮とも元伊勢と呼ばれてきた。

大化改新後の白鳳十一年（六七一年）、祭神の彦火火出見尊が雪の中から籠に乗って現れたという伝承に基づき、社名を籠宮と改め、彦火火出見を祀ってきた。

その後、養老三年（七一九年）に眞名井原から現在地に遷座し、主祭神を海部氏の祖・彦火明命に改めるとともに、天照大神・豊受大神・海神・天水分神を相殿に祀ったと伝わる。

往古、眞名井原に割拠した海神は、海部氏を率いて丹後地方を支配し、神仙の国・蓬萊郷づくり、龍神信仰流布に尽力してきたらしい。従って、当初の主神は海神だったはずだ。

ところが大乱の十数年前、海神は伊弉諾や豊受皇太神に膝を屈し、大乱後も、邪馬台国の天照大神・天火明親子に跪き、常世づくりへの転換を強いられた。丹後半島に、伊弉諾が眞名井原に天降るために設けた梯子が倒壊し、天橋立と化した伝説、『丹後国風土記』の天火明にちなむ常世島（宮津沖の冠島）伝説、田道間守が常世から帰り着く常世浜伝説が残るのは、これがためだ。

以降、天火明・天香山親子が眞名井原や尾張熱田に割拠して丹波道・東海道を治めた。同時に、豊国配下にあった海部氏が彦火明（天火明）の子孫として眞名井神社や与謝宮を司祭してきた。

晩年のヒミコは、謀反を企てた天火明親子を東国に追放する一方、天孫火瓊瓊杵の児・海幸彦（火明と饒速日を襲名）・天香語山親子を日向から呼び寄せ、先代の名と地位を継がせた。



その後、尾張や丹後を治めたのは、火明饒速日を祖とする海部氏だ。その本家筋の尾張家は、熱田神宮を司祭して草薙剣を奉じてきた。丹後海部家も眞名井神社・与謝宮・籠神社の官司を世襲し、彦火明命・火火出見、天照大神・豊受大神を祀ってきた。同時に、日本最古の海部氏系図を伝え、外宮の元伊勢と主張する。外宮の由来書も、伊勢大神が籠神社から勧請された由を伝える。

【本系図】 始祖彦火明一〇一〇一三世孫倭宿禰一（後世の書き込み十七世孫）武振熊

【勘注系図】 始祖彦火明一兒天香語山一孫天村雲一天忍人（亦の名倭宿禰）一

☆倭国王朝期、海神の配下にあった海部氏は、倭国重鎮として国東を統治する豊国傘下に移された。以後、豊国権勢下で尾張や丹後、さらに隱岐、紀伊、阿波に進出したらしい。

そうであるなら、海部氏系図本系図の始祖彦火明Ⅱ天孫天火明、勘注系図の始祖彦火明Ⅱ火明饒速日であって然るべきだ。ちなみに、現官司は初代彦火明から数えて八十二代目にあたるという。

伊勢神宮の祭祀においても、籠神社は古代丹後地方で月次祭・新嘗祭の奉幣に預かるただ一つ

の神社であったし、籠神社の高欄上にある五色の座玉すゑたま（黄青白赤黒Ⅱ大地と東西南北、黄帝と四方の天帝？）は伊勢神宮とここだけにしかない。これだけでも、籠神社の格式の高さや海部氏系図（平安時代書写の本系図と勘注系図）の重要さがわかるというものだ。

この海部氏系図は、戦前には問題視されて門外不出とされた。だが戦後には、その価値が見直されて国室に指定された。これには、理由がある。この本系図と『古事記』の系譜などを重ねると、磐余彦（神武）と神功が共に三世紀後半に生きた人物で、かつ夫婦、さらに八幡が磐余彦と神功の児であることが浮かび上がってくる。そうであるなら、皇統万世一系とされてきた「記紀」の王系譜は根底から崩れることになる。ここに到った道筋を順序だつて辿って行きたい。

☆「記紀」では、磐余彦は、夏王朝の開祖・啓のごとく、神代と袂を分かつて新王朝を開いた

始馭天下之天皇はつこくじしらすのスメミコトであり、その建国時期は前六六〇年頃とされる。神功の方は、仲哀皇后として四世紀中頃に活躍する一方、三世紀中ごろの倭女王ヒミコやトヨに見立てられた。

本書での磐余彦は、神国・常世づくりに突っ走る邪馬台国を三世紀末に倒し、辛酉年の三〇一年元旦に大和朝廷を開き、初代天皇に立つとしている。一方の神功は、三世紀後半に邪馬台国の四代女王に立ち、ついで仲哀皇后となるが、その後は仲哀（蒼津別の兄か孫、氣比大神）を見限って磐余彦の妃に転じ、磐余彦と共に大和朝廷を開くと見る。その結果、磐余彦の生存時期に九百年以上の隔たりが生じた。神功のそれも、百数十年の年代差が出てくる。

①本系図に沿って考えた場合

本系図の始祖彦火明について、『古事記』も『日本書紀』も、天孫火瓊瓊杵の兄弟と伝える。

『日本書紀』「天忍穗耳尊、高皇産靈尊の女栲幡千千姫を娶り、妃としたまいて、児を生ましむ。天照国照彦天火明命と号く。是尾張連等が遠祖なり。次に火瓊瓊杵尊・・」

『古事記』「天忍穗耳尊、万幡豊秋津姫命に）生ませる子、天火明命。次に日子火瓊瓊杵」  
『先代旧事本紀』の伝える饒速日も、天忍穗耳の兄天孫である。彼は天神の詔をうけて大倭国鳥見の白庭山に遷座し、長スネ彦の妹御炊屋姫を妃に娶ったが、妃の懐妊中に逝ってしまった。

「時に正哉吾勝々速日天忍穗耳尊、奏して曰さく、『僕將に降らむと欲い、装束う間に生れし児あり。これを以て降すべし』ともうす。詔して之を許したまう。

天神の御祖、詔して、天璽あまじしるしの瑞宝みづのたから十種を授く。・・饒速日尊、天神の御祖の詔をうけて、天の磐船に乗りて、河内国河上峰いかるがに天降り坐し、則ち大倭国鳥見の白庭山に遷り坐す。いわゆる天の磐船に乗りて大虚空おほそらを翔り行きてこの郷くにを巡りに睨りて天降り坐す。饒速日尊、

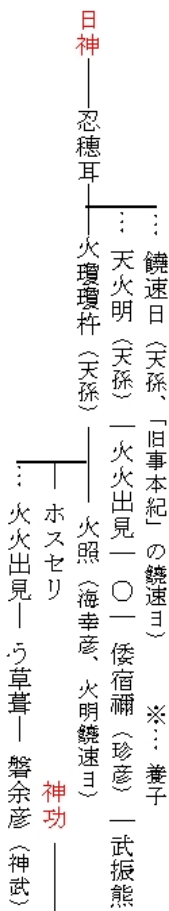
便ち長スネ彦の妹御炊屋姫命を娶りて妃と為し、妊胎したまう。未だ産む時に及ばざるに、饒速日尊、すでに神損去亡坐しぬ。」

本系図に登場する武振熊は、神功の將軍であり、ワニ族の祖とされる人物だ。竹内宿禰と共に仲哀方の忍熊王を討った。倭宿禰についても、以下の記事から特定することができる。

「神武記」、「亀の甲に乗りて釣りしつ打ち羽ねぶき来る人、槁根津日子（倭国造等の祖）」「神武紀」、「天皇、功を定め賞を行いたまう。珍彦（椎根津彦、槁根津日子）を倭国造とす」

『先代旧事本紀』、「珍彦は火火出見の孫で、神武朝に導士の功によって大倭国造となった」、【籠神社の伝承】、「海部宮司家四代目の祖・珍彦は、神武東遷の折、亀にのって現れ、大和へ

先導した。建国の功労者として、倭宿禰の称号を賜った」  
以上を系図に置き換えると、このようになる。



この合成系図では、彦火明（天火明）・火火出見・倭宿禰（珍彦）、磐余彦・神功・武振熊の間に何ら不都合がないこと、また武振熊が神功の將軍と確認した上で、彦火明から武振熊までが五世、火瓊瓊杵から磐余彦までが四世であることを指折り数えて頂きたい。結果は、磐余彦と神功が同じ時代に生きた事実が浮かび上がってくる。

②勘注系図に沿って考えた場合。

「記紀」は火瓊瓊杵と木花開耶姫の間に生まれた三皇子について、このように伝える。

「記」、火照（海幸彦、隼人阿多君の祖）、火スセリ、火遠（穗穗手見）

「紀」、火スセリ（海幸彦、隼人の祖）、火火出見（火折）、火明（海幸彦、尾張連の祖）

結局、『先代旧事本紀』も「記紀」も、火瓊瓊杵の兄・火照（海幸彦）が火明としている。

この火照（海幸彦）こそ、勘注系図の彦火明（火明饒速日）なのだ。彼について、『先代旧事本紀』尾張氏系譜・国造本紀、『但馬故事記』、「神武紀」はこう伝える。

『先代旧事本紀』尾張氏系譜、饒速日命亦名天火明命一兒天香語山命一孫天村雲命一天忍人国造本紀、「天香語山は天照大神のひ孫・饒速日と天道姫の間に生まれた。亦の名は高倉下」  
『但馬故事記』、「饒速日は勅と十種の神宝を奉じて妃天道姫や隨身らを率い、丹波真名井原、ついで生駒に天降った。天道姫が丹波で産んだ児を天香語山、そのまた児を天村雲という」

「神武紀」、「塩土老翁に聞きき。曰いしく、『東に美き地有り。青山四周れり。其の中に亦、天磐船に乗りて飛び降る者有り』といいき。余謂うに、彼の地は、必ず以て大業を恢弘べて、天下に光宅るに足りぬべし。蓋し六合の中心か。その飛び降るといふ者は、是饒速日と謂うか」、「時に長スネ彦、乃ち行人を遣して、天皇に言して曰さく。『嘗、天神の子有しまして、天磐船に乗りて、天より降り止でませり。号けて櫛玉饒速日命と曰す。是吾が妹三炊屋媛（亦の名は長スネ媛。亦の名は鳥見屋媛）を娶りて、児息有り。名をば可美真手命と曰す。故、吾、饒速日命を以て、君として奉えまつる。夫れ天神の子、豈兩種有さむや。奈何ぞ更に天神の子と称りて、人の地を奪わむ。』ともうす。

天皇の曰わく、『天神の子亦多にあり。汝が君とする所、実に天神の子ならば、必ず表物有らむ。相せよ』とのたまう。長スネ彦、即ち饒速日命の天羽羽矢一隻及び歩鞞を取りて、天皇に示せ奉る。天皇、覽して曰わく、『事不虛なり』とのたまいて、還りて所御の天

羽羽矢一隻及び歩鞞を以て、長スネ彦に賜示う。長スネ彦、其の天表を見て・・・」

この饒速日と三炊屋媛は、『先代旧事本紀』の天孫饒速日や御炊屋姫と経歴が異なっており、同一人物ではない。先代の饒速日や御炊屋姫を襲名して、その生き様を再現してみせた人物なのだ。結局、本系図の彦火明（天孫天火明）も勘注系図の彦火明（海幸彦、火明饒速日）も、天孫饒速日に倣い、高千穂宮や西都を發つて丹後眞名井原に立ち寄つた後、大倭に天降つたわけだ。

③神武（磐余彦）と神功と応神（八幡）の関係

神功は橿日宮で「新羅は、お腹に宿つた児が治める国だ」との神託を授かると、新羅遠征に向かった。凱旋した神功は博多に上陸した後、宇美に移つて皇子を出生した。これに関して「記紀」は、「応神は筑紫の蚊田に生れた」、「神功太子は、敦賀の氣比大神と名を交換した」と記す。

「神功紀」、「十二月に、菅田天皇を筑紫に生れたまう。時人、その産処を号して宇瀨という」

「仲哀記」「建内宿禰命、その太子を率て、・・角鹿に飯官を造りて坐さしめき。そこに坐す伊奢沙和氣大神命、夜の夢に見えて云りたまひしく、『吾が名を御子の御名に易えまく欲し』」

「応神紀」、「菅田天皇は、仲哀九年の）冬十二月を以て、筑紫の蚊田に生れませり」、

「一に云わく。天皇、太子と為りて、越国に行でまして角鹿の筥飯大神を拝祭みたてまつりたまう。時に大神と太子と、名を相易えたまう。故、大神を号けて去来紗別神と曰す。太子を

ば、はだわけ菅田別尊と名くという。然らば大神の本の名を菅田別神、太子の元の名をば去来紗別尊と謂すべし。然れども見ゆる所無くして、未だ詳ならず」

④この一連の説話は、一見すると、神託を受けて宇美で生まれた皇子Ⅱ太子Ⅱ応神と受け取れるが、肝心な点で話がかみ合っていない。この件に関しては、考えるほどに疑問が湧いて出る。

一、仲哀が新羅国さえ知らないのに、なぜ神功の孕んだ皇子が新羅統治の神託を受けるのか。

一、なぜ、この皇子が氣比大神と名を取り替える必要などあるのか。

一、新羅統治の神託が実行されないままに、なぜこの皇子が応神天皇に立つことができたのか。

一般的に、八幡信仰は宇佐神宮（宇佐市）が最古とされるが、磐余彦が祖父の火火出見を祀り始めた鹿兒島神宮も、「当宮の石体宮こそ、八幡信仰の発祥地」と主張して一歩も譲らない。

その石体宮は、磐余彦が東征計画を練った所とされ、彼にちなむ巨石を御神体として祀る。同時に、お産の神様としても有名だ。それは、神功が石体宮で応神（八幡）を産んだからとされる。

『水鏡』も『今昔物語集』も、一一三二年の大宰府文書も、神功がここで八幡を産むことや、石体宮の巨石に八幡の文字が刻まれていた由を伝える。

阿蘇神社（阿蘇市）の縁起も、「神武天皇（磐余彦）の長男は、阿蘇草部の娘と結婚して阿蘇権現となるが、三男は兄の勧めで都に出て神功に宿り、八幡としてこの世に生まれた」と伝える。

これから推すと、神託を受けて宇美で生まれた皇子は、太子や応神ではないと言いつける。では、全体の組み立てがどうであったなら、万事つじつまが合い、しかも三つの疑問がそろって解消するのか。結論から言うと、神功には、三人の皇子がいたらしい。氣比で生まれ育った長男、神託を受けて宇美で誕生する次男、ついで石体宮で誕生する三男の八幡である。

その中で、応神天皇に立つのは、『水鏡』や鹿兒島神宮の伝える八幡以外に見当たらない。そもそも神功が『新羅は、お腹の児が治めるところの国だ』という神託を巫女の口から語らせた

のも、仲哀の児が天皇に立てる道理がないと踏んだからだ。

⑤筆者は神功と応神にまつわる「記紀」の記述・神社の縁起、各地の伝承全てが真実を伝えていると見て、以下の筋書きを組み立てた上で、これに沿った系譜もこしらえた。紹介しておきたい。

- 一、神功は熊襲征伐の勅命が降ったことで、角鹿氣比に菅田別を残したまま橿日宮に出陣した。
- 二、仲哀はお告げを無視し、橿日宮から熊襲征伐に打って出たが、磐余彦側の熊襲に惨敗した。
- 三、橿日に留まっていた神功は、仲哀を見限って東征軍を招き入れると、磐余彦の妃に納まった。
- 四、既に、仲哀の児を宿していた神功は、「お腹の児が天皇に立つ道は断たれた。統治できる国は、もはや新羅以外にない」という想いに駆られて橿日宮で神託を受け、新羅遠征に向かった。

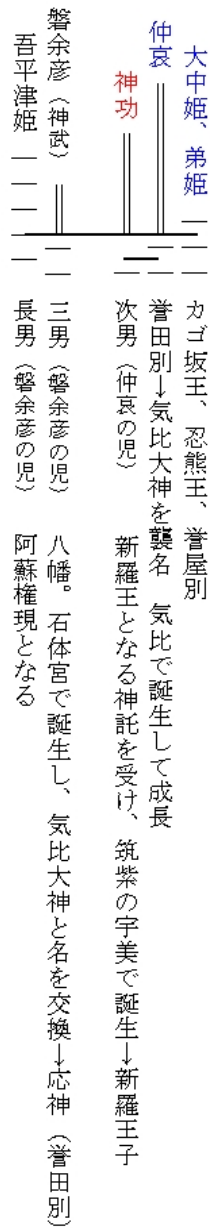
五、筑紫に凱旋した神功は、宇美に移り、そこで次男（仲哀の児）を出産した。

六、その後、神功は石体宮で三男八幡（磐余彦の児）を出産した。

七、何年か後、神功は三男（磐余彦の児）や建内宿禰と共に東征軍の跡を追った。

八、磐余彦が日本朝を倒して大和朝廷を開くと、建内宿禰は太子の三男（磐余彦の児）を率いて角鹿に赴き、氣比の菅田別（氣比大神、仲哀の児）と名を取り換えた。これが応神天皇である。

⑤以上をまとめて系譜に置き換えると、こうなる。





## ◇「記紀」系譜の復元Ⅱ「記紀」本来の王系譜

これらに「記紀」や「倭人伝」の記述を重ねると、以下の歴史が浮かび上がってくる。

「大乱後、倭奴国王朝七代倭王の伊奘諾は、皇太神の建てた邪馬台国に敗れ、向津姫（天照大御神）ともども日向に逃げ落ちた。その末裔が東征して邪馬台国を討ち、大和朝廷を開いた」

ところが、大和朝廷と「記紀」編纂者たちは、神武—崇神—応神とあるべきところに、神武—崇神の間に大倭王八代（綏靖—開化）を挟み、崇神—応神の間に垂仁・景行・成務・仲哀の邪馬台国王四代を割り込ませ、皇統万世一系に創り変えた。その結果、「記紀」は矛盾だらけと化した。本書の王系譜から推理を重ねると、以下の歴史が次々と判明してくる。

「大乱後、怡土に天宮した倭奴国王朝が瓦解し、大倭に天照大神がオロチ・巖之国王朝を再現した瑞穂の邪馬台国、日向の高千穂郷に日神の天照大御神が天宮する天之国（高天）が並び立った。

一二〇年代前半、日神は火瓊瓊杵に吾田降臨を詔した直後、高千穂宮から大倭纏向宮に遷座して、倭の女王に共立されるや、巖之国王朝を天（巖）之国王朝（倭国）に模様替えした。この間、薩摩吾田に天降った火瓊瓊杵は、笠沙に都して日隈家（日前）再興を果たした。

晩年（二四〇年代末）の女王は、火瓊瓊杵の児・海幸彦を日向から招いて日本朝を興すよう命じた後、夫天照大神の御霊が心置きなく降臨できる聖地を求めて、伊勢国五十鈴の川上に遷った。

火明饒速日（海幸彦）率いる日本朝は、日前を熊襲（狗奴国）と呼んで蔑み、再三襲いかかった。二八四年、和国（日前）を継承した磐余彦（火瓊瓊杵のひ孫）は日本朝を討つべく日向を発った。

三世紀末、磐余彦率いる東征軍は大倭磯城に雪崩れ込み、日本朝を打倒した。

三〇一年、磐余彦は畝傍の橿原に都して大和朝廷を開き、初代天阜（神武）に即位した。

三〇四年、神武は鳥見山北麓の霊時で郊祭して、日神夫妻を高祖皇宗に奉った。ここに、日神の切望した倭（奴）国王朝再現が晴れて叶った」



### 本書王系譜の検証

「記紀」では、崇神と竹内宿禰は孝元の孫。日本武は景行と稲日太郎姫の児で、垂仁と稚武彦の孫。孝元の弟稚武彦は、稲日太郎姫の父。従って、孝元・垂仁・稚武彦は同世代、崇神・竹内宿禰・日本武は、その孫世代となる。一方、景行、日本武、磐之媛は二、三代離れて二人が存在し、景行・稲日太郎姫・日本武の夫婦や親子関係に、多々疑問が残る。

更に言うと、神武、孝安、孝靈、崇神、垂仁、景行、竹内宿禰、倭姫は百歳以上の寿命とされ、天日槍と大己貴の存命期も神代なのか垂仁期か定かでない。垂仁、景行、日本武に関する疑念は数え上げると際限がない。それが本書の系譜では、全てが自然消滅していく。検証しておこう。

一、「記紀」の景行、日本武、磐之媛は、一、三代離れて二人が存在。↓本書では、単に一人。

一、「記紀」の景行は、稲日太郎姫を妻に娶るが、彼は稲日太郎姫の三世代後に誕生した。つまり曾孫ほどの年齢差がある。仁徳・磐之媛夫婦も然りだ。↓本書では、いづれの夫婦も適齢期。

一、鹿兒島神宮は、「八幡（応神）は石体宮（磐余彦が東征計画を練った所）で生まれた。当宮こそ八幡信仰の発祥地だ」と主張して一歩も譲らない。『水鏡』も『今昔物語集』も、神功がここで八幡を産んだと伝える。↓磐余彦と神功は同世代。神功は仲哀妃から磐余彦妃に転身。

一、垂仁・景行は纏向に都して、その御世は四世紀初頭く中頃とされるが、纏向遺跡は四世紀初めに衰退し始めた。↓本書では、垂仁も景行も三世紀前半く後半の天神や倭王（天皇）。

一、「垂仁紀」は、天日槍が垂仁期に襲来したとする一方、『播磨国風土記』は天日槍が神代に大活躍する大己貴（素戔嗚美子）と播磨で戦ったと記す。↓本書では、共に三世紀前半の人物。

一、「記紀」では、神武から垂仁に至る間、百歳以上生きたとする天皇が目白押しに存在する。神武が百三十七歳、大倭王孝安は百二十三歳、孝靈は百六歳、崇神は百六十八歳、垂仁は百五十三歳とある。倭姫や武内宿禰に至っては、六百歳、三百歳の長寿とされてきた。

↓本書では、神武、孝安・孝靈、崇神・垂仁、倭姫、武内宿禰の寿命は、高々六〇く八〇歳代。

## ◇邪馬台国の興亡と大和朝廷成立までの歴史詳細

**日隈**(日向、熊野家)の**伊弉諾**、**倭奴国王朝**の東方統治立て直しに奔走

↓**豊葦原中つ国**王の大穴持(大國主)を伊弉諾太子(熊野櫛御氣野)に引き取り、**向津姫**(六代女系天神の宗女)の婿養子(「**豊受天照皇太神**」)に押し込む

180年過ぎ

畿内才口子勢、騒乱↓伊弉諾、淡路島に仮宮して鎮圧に赴く

**皇太神**、副都を治める**大倭国**・三輪大物主と組み、謀反↓神戸市東部で**倭国大乱勃発**

180年代中頃

↓出雲半島閻見国(月夜見国、黄泉国)で決戦

**天叢雲**、**才口子**、水天神**天照大神**と語り、**邪馬台国**(瑞穂の敵之国)王朝建国

185年頃

↓銅剣**天叢雲剣**を天璽に奉る

**伊弉諾**、北九州を蹂躪され、日向に敗走

180年代後半

**向津姫**と**素戔嗚**、伊弉諾旗下の日隈、大山祇、海神本家・海神三神、

住吉神・住吉三神も、熊襲の薩摩や日向に敗走

**伊弉諾**、敵に屈して禊払い(降伏の儀式)を強いられる

**伊弉諾**嫡子の**日子(蛭児)**↓人質(蛭子)として三輪氏に護送

薩摩の**大山祇**(木花開耶姫の父)と日向の**海神本家筋**

(海神本家に婿入りした豊玉彦)↓邪馬台国寄りの瑞穂国建国

**伊弉諾**と**向津姫**、高千穂郷に**高天(倭国)**再現↓天宮**高千穂宮**開都

**向津姫**、**天照大御神**と**日神**に昇り、八咫鏡を天璽に奉る

敵香来雷の娘・稚産霊を分身**稚日女**に起用

180年代後半

倭国 Ⅱ (高天、天之国+日高) Ⅱ 天之国が蘇る国

素戔嗚、養子五十猛を連れ、新羅に出奔↓奥出雲に潜入

↓八俣大蛇(才口子の天照大神親子)退治↓出雲熊野家再興

↓熊野櫛御氣野の名も併せ持つ

豊葦原中つ国再興に奮戦するも四苦八苦

素戔嗚実子の大己貴(大国主)、葦原中つ国再建

播磨・丹後・越前高志勢と組み、邪馬台国を執拗に攻撃

天日槍、甲兵八千を引き連れ、播磨に襲来↓大己貴に大敗

天照大神、日神に政奉還決意↓高天に赴いて高皇産靈と語り

十握剣で日神守護↓葦原中つ国平定↓大己貴の国譲り

↓天火明と大己貴を連れ、丹後・近江經由で大倭に向かう

↓道中の近江高島宮で天成神道による所造天下に腐心

↓所造天下策を国是に掲げ、大己貴に纏向上之宮造営、火明に東国征伐を下命

火瓊瓊杵、吾田に降臨↓笠沙宮を開き、日隈(日前)再興

木花開耶姫(女神大山祇と結婚)↓大山祇家、火瓊瓊杵の外戚

天火明(二代垂仁)、大倭に日高見国建国

天火明の児・菅津別(火火出見)、誕生

日神、素戔嗚と共に丹後・淡路・紀伊經由で大倭に向かう

熊野に向かう途上で、天照大神逝去

急遽纏向入りし、大喪↓天照大神を纏向石塚古墳に埋葬

100年代初め

100年代

200年代

200年代中頃

220年代中頃

倭奴国⇨倭国+豊葦原中つ国⇨倭国が蘇る国

邪馬台国と高天、日神を倭の女王ヒミコに共立

ヒミコ、瑞穂の厳之国王朝を天(厳之国王朝)倭に模様替え

伊都国(舌野ヶ里)に副都開都

220年代中頃

天照大神妃・瀬織津姫を分身に起用↓鬼道による祭政に熱中

倭国配下の豪族に祝いの八咫鏡を配布

火火出見、日向降臨↓薩摩の大山祇家に婿養子入り↓山幸彦

火瓊瓊杵、西都市妻に遷都し、日向の西都開都

220年代

火瓊瓊杵の兄・火照、誕生↓日向の海神家に居候↓海幸彦

妻の国(女神大山祇家、投馬国)を薩摩から西都に国替え

日向の海神本家筋を薩摩の開聞岳北麓に国替え

海幸彦、日向に居座り続ける

女神大山祇家に養子入りした火火出見↓開聞岳北麓に移住

天火明、常陸・陸奥を制圧。千葉県市原市惣社に東都を開き、

日高見国を東都に国替え↓常陸・陸奥まで統治

230年代

倭の女王ヒミコ、魏に朝貢

238年

自身の寿陵、ホケノ山古庵を纏向に造営

火火出見(山幸彦、豊玉彦の娘・豊玉姫と結婚↓海神本家筋、火火出見の外戚

火火出見、日向に帰国↓海幸彦と太子の座を争う

240年前後

敗れた海幸彦、火火出見に命乞いして、宮殿守護を誓約

**ヒミコ**、火瓊瓊杵と仲違いし、相争う↓その最中に**天火明** 謀反

↓笠縫邑に遷座し、**高皇産靈**・**天照大神**に加護を祈願

↓**天火明**にくしのあまり、**火瓊瓊杵**と和睦↓**天火明**と**日高見勢**、東北に逃走

火瓊瓊杵に一代限りの**和王**僭称を許可、

火瓊瓊杵の兄・**海幸彦**に**倭王**位を確約し、纏向参内を促す

天火明の娘・**豊鍬入姫**(トヨ)を自身の宗女に指名

天火明の娘・**倭姫**をトヨ後継者に指名

**海幸彦**(火明と饒速日を襲名)、**火明饒速日**、日向から大倭に天降り

247～8年  
248年頃

**ヒミコ**に見えて瑞宝・羽羽矢、八咫鏡・十握剣を賜り、

**天火明**と**饒速日**(天照大神の孫、初代垂仁)の家督相続

纏向珠城丘陵に移り住み、**日本の倭家**(日本家)創設

**天照大御神**、**倭姫**を連れ、笠縫邑から伊勢五十鈴宮に遷座

檜御柱と**天叢雲剣**で以て**高皇産靈**・**天照大神**の再来を祈願↓250年頃、逝去

↓箸墓円形壇のもがり屋に仮葬

↓ホケノ山古庵に移葬後、円壇を周濠付き円墳に改築↓墳頂に本葬

**火明饒速日**(三代垂仁)、纏向**玉城宮**に都し、**日本朝**(日本家+大日本国(大倭国))創設

↓**ヒミコ**流の**倭**(奴)国王朝再現を目指す

↓瑞宝・羽羽矢を天璽、八咫鏡・十握剣を神璽に奉る

↓騒乱勃発↓二代女王トヨ擁立で漸く鎮まる↓**十握剣**で女王トヨを守護

**火火出見**、**火瓊瓊杵**の**日前**を継ぎ、高千穂宮(霧島市)開都



**火明饒速日**、一都七道制(大倭国、西海道・山陽道・山陰道

・北陸道・東山道・東海道・南海道採用(道の長→都督、道主)

女王**トヨ**、晋に朝貢

265～6年

**火明饒速日**、箸墓円墳を周濠付き帆立形前方後円墳に改造

↓使節の帰国後、泰山に見立てて郊祭し、天神**天照国照彦天火明饒速日**と語る

**トヨ**、逝去↓**倭迹迹日百襲姫**が三代女王に立つが程なく逝去

**トヨ**↓ホケノ山古墳、**倭迹迹姫**↓箸墓方墳に埋葬(箸墓伝説)

**氣長足姫**(神功皇后)、四代女王に即位

270年代前半

**火火出見**、高千穂宮を高原町に遷都し、**和国**と改名

**日神**と**火瓊瓊杵**の政再現、**倭(奴)国王朝**再興、**日隈(日前)**・

熊野家の先祖祭祀復興を唱え、**和主**と語る

270年代前半

**倭王の景行**、**熊襲**征伐に赴くが捕らわれる

270年代後半

**磐余彦**、**日神**と**火瓊瓊杵**の政再現、**倭(奴)国王朝**再興、**日隈(日前)**

・熊野家の先祖祭祀復興を唱え、**和主**に立つ

280年代前半

西海道都督の**仲哀**、**またも熊襲**征伐に赴く

280年代前半

**磐余彦**(火火出見の孫、神武)、高千穂宮(宮崎市)から東征

280年代中頃

倭国の副都・**伊都国**(吉野ヶ里)、陥落

280年代中頃

戦死した功労者に葬送用八咫鏡を副え、古墳に手厚く埋葬

**仲哀**に従った**神功**・日本武尊ら、東征軍に寝返り↓**倭姫**、五代女王に即位

280年代後半

**神功**、東征軍に守られ、三韓征伐(新羅遠征)

280年代後半

紀伊秋月で**日隈(日前)**、那智熊野で熊野家の先祖祭祀復興

東征軍、大倭磯城に攻め入り、日本軍を成敗

日本の饒速日、天璽の瑞宝と羽羽矢、神璽の八咫鏡・十握剣を差し出す

↓警余彦に帰順を願い出る

298年頃

警余彦、大倭国と組み、大和朝廷樹立

290年代末

↓和国流の倭(奴)国王朝再興

※大和の大↓大倭国(天日本家)↓大和の和↓和国

畝傍に橿原宮造営を下命

箸墓をバチ型前方後円墳に改造し、方墳先端にトヨを本葬

黒塚古墳を造営して北郊し、日本軍の武將を丁重に埋葬

桜井茶臼山古墳の造営下命

日本武尊に日高見の蝦夷征伐を下命

290年代末

↓任務を終えた日本武尊、帰途の三軍で病死

可美真手(火明饒速日の児)に物部姓を与え、十握剣で朝廷と警余彦の警護下命

↓父の海幸彦に代わり、火火出見との誓約履行

伊勢神宮の祭祀を和国流に改革

神日本警余彦火火出見(神武)、即位

301年元旦

齋部の天甕、天璽の鏡・剣を捧げ持って正殿に奉る

神日本警余彦火火出見「火火出見の遺志を継ぎ、三輪氏と日本朝を降した警余彦

石塚古墳の天照大神御霊・箸墓のヒミコ御霊を日神と高皇産靈御魂に蘇らせた後、

鳥見山祭場(桜井茶臼山古墳)に遷して郊祭し、皇祖天神(皇祖皇宗)に奉る

304年2月

## ◇邪馬台国の興亡史概略

## ①倭国大乱（一八五年頃）～一八〇年代後半

伊奘諾、豊受（天照）皇太神（六代女系天神の宗女・向津姫の入り婿）に副都唐古の経営および東方統治の一切合切を委ねる↓畿内オロチ族、挙って騒ぐ

↓怡土（福岡県糸島市）に天宮する六代女系天神・天尾羽張、伊奘諾に東方建て直しを勅命

↓伊奘諾、淡路沼島や丹後宮津に仮宮し、鎮圧に赴く↓皇太神、オロチ三輪氏と組み、謀反

↓神戸市東部で、倭国大乱勃発↓伊奘諾率いる西軍、敗退↓伊奘冉、出雲半島に拉致される

↓伊奘諾、出雲半島の闇見国（月夜見国、黄泉国）で天下分け目の決戦に大敗

↓皇太神、瑞穂の蔽之国王朝（オロチ蔽之国王朝を再現、邪馬台国）を建て、天照大神と語る

↓邪馬台国、北九州を席卷し、熊襲に攻め入る↓伊奘諾と向津姫、熊襲の日向に逃げ込む

↓伊奘諾と向津姫、日向で禊払い（降伏の儀式）後、高千穂郷に遷る

↓向津姫、天之国率いる高天再建後、天照大御神と七代女系天神日神に昇り、高千穂宮に天宮す

↓倭奴国王朝、高天と邪馬台国に分裂

## ②一九〇年頃～二二〇年頃（天宮高千穂宮時代）

素戔嗚、奥出雲に潜入し、大蛇（天照大神親子）退治↓豊葦原中つ国再建・熊野家再興に奮闘

↓忍穂耳、摂津の豊葦原瑞穂国降臨を試みたが、大己貴（素戔嗚実子）に妨害される

↓大己貴、葦原中つ国建て直しに成功

↓素戔嗚養子の五十猛（天日槍）、新羅の甲兵八千と共に襲来↓宍粟邑で、大己貴勢に惨敗

↓大己貴、播磨を席卷後、越オロチ族と組み、邪馬台国を執拗に攻撃

↓天照大神、妻の日神と組んで高千穂宮に赴き、高皇産靈と語る

↓天孫饒速日（初代垂仁）が大倭降臨↓一年足らずで急逝

## ③二二〇年代前半〜ヒミコの朝貢

- 高阜産霊、葦原中つ国平定軍を編成して出雲に送る↓畿内オロチ軍も大倭から出雲に侵入  
 ↓大己貴、戦わずして国譲り↓忍穗耳、再度降臨↓大己貴が妨害↓天孫火瓊瓊杵が出雲經由で大倭降臨を試みたが、大己貴と三輪氏が猛反対↓日神と高阜産霊、火瓊瓊杵に吾田降臨下命  
 ↓高阜産霊、天孫彦火明・大己貴らを連れ、大倭に向かう  
 ↓火瓊瓊杵、呉軍襲来阻止を背負わされ、吾田に降臨↓直後、日神と素戔嗚、大倭に旅立つ。途上の紀伊秋月で、五十猛に紀伊熊野家建国を許す↓火瓊瓊杵、笠沙宮を開き、日隈（日前）再興  
 ↓天火明、大倭に日高見国建国↓天照大神（高阜産霊）、大倭で急逝  
 ↓日神、纏向に遷座して嚴之国王朝を天（嚴）王朝（倭）に模様替えして、女王ヒミコに立つ  
 ↓火瓊瓊杵、西都市妻（西都）に遷都  
 ↓天火明、関東から陸奥まで制圧。千葉県市原市惣社に東都を開き、日高見国を東国に国替え  
 ↓ヒミコ、天孫両家に嫡子交換を下命  
 ↓天火明（二代垂仁）皇子の菅津別、日向の女神大山祇家に天降り、火火出見（山幸彦）と語る  
 ↓火瓊瓊杵皇子の火照（海幸彦）と火火出見、相争う↓二二八年、ヒミコ、魏に朝貢

## ④二四〇年代後半

- 火瓊瓊杵、ヒミコと対立し、高城千台（せんのおてな）宮（薩摩川内市）に遷都  
 「倭人伝」、倭女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥呼と素より和せず。  
 ↓天火明、ヒミコに謀反し、退位を迫る↓失敗して常陸や陸奥に逃亡  
 ↓ヒミコ、火瓊瓊杵と和睦↓火瓊瓊杵の兄・海幸彦、火明と饒速日を襲名して大倭降臨  
 ↓ヒミコ、逝去↓箸墓古墳円形壇に葬られる↓程なく、円形壇は円墳に改築

⑤二五〇年代後半～二八〇年代中頃（神武、東征出立）

火明饒速日（三代垂仁）、日本王朝を開くが、國中服さず

↓トヨ（豊鍬入姫）を二代女王に立て、國中定まる

↓火瓊瓊杵、逝去↓跡継の火火出見、都城市都島に高千穂宮を開く。その後、霧島市隼人町に高

千穂宮を遷都して、日前を和国と改名

↓二六六年、女王トヨが晋に朝貢直後、火明饒速日、天神に就任↓女王トヨ、病床に伏す

↓倭迹迹日百襲姫、三代女王に即位。数か月後急逝↓気長足姫（神功）、四代女王に即位

↓景行、火明饒速日から熊襲征伐を下命される↓大敗して日向で幽閉され、六年後に帰国

↓火火出見、逝去↓孫の磐余彦、火火出見の家督・遺志を引き継ぎ、宮崎市に高千穂宮を開く

↓仲哀、日本武・神功らを引き連れ、熊襲征伐に赴く↓磐余彦、東征を決断し、日向を出立

↓仲哀軍、敗退↓日本武・神功、東征軍に寝返る↓倭姫、五代女王に即位

⑥二九〇年代末（日本朝滅亡）

東征軍、副都伊都国を攻略後、十余年かけて北九州、吉備、出雲、四国、摂津、紀伊を制圧

↓磐余彦、熊野から大倭磯城に侵攻して、日本軍撃破↓饒速日、宝器を差し出して帰順

↓饒速日の児・可美真手、物部氏の名を賜り、磐余彦に仕える

⑦大和朝廷の始まり

三〇一年元旦、磐余彦、大和朝廷の初代天皇（神武）に即位

↓三〇四年二月、鳥見山北麓に靈時（桜井茶白山古墳）を設けて郊祭し、皇祖天神（天照大御神

と高皇産靈）を天に配して皇祖天神（皇祖皇宗）に奉る

---

『邪馬台三国志』邪馬台国はどこか

---

著 高田康利

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---